

せめてクリスマスは誰
かと過ごしたいんです。

Cyaegha

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ハロー、こちらはアリスです。

誰かいたら返事をください。本当にみんな消えちゃったんですか？

——12月24日早朝、ある家に置かれていたメモ帳から

※ちよつと歪んだ百合かもしれません……ご注意。

目次

一人ぼっちの聖夜、もしくは51回の逢着。	1
暴かれるtruth……	17

一人ぼっちの聖夜、もしくは51回の逢着。

It is the life of the crystal,
the fire of the frost, the soul of the sunbeam.

the architect of the flake,
雪片の建築、

霜の炎、太陽光線の魂。

This crisp winter air is full of it.
この爽やかな冬の空気はそれでいっぱいだ。

——ジョン・バローズ

機種によって特殊タグが正しく表示されない場合があります。

「お………おお！」

朝、そして雪だ。窓から強く降り回る雪を見る。ファンタジックな光景に見惚れるけれども、逃れられない感覚、部屋はひんやりとしているからあまり良い家ではないと改めて実感してしまう。仕方なく暖房を入れてわたしは部屋から出た。

リビングで毎朝の習慣としてクリスマスパーティーの絵が描かれたアドベント・カレンダーを開く。あと2日しか残っていないからすぐに見つかる……あつた、「24」。

カレンダーは中が25部屋に区切られた箱で、日替わりのお菓子が2個ずつ入っている。今日は……。

「キャラメル！」

当たり前！ 私の好物。片方を口に含み、もう片方はポケットに入れたままにしてキッチンへと向かう。

キッチンに着いたら四角いキャラメルを口の中で転がしつつ、昨日のカレーをコンロで火にかける。ついでに昨日と変わらないパックご飯を電子レンジに入れておく。濃厚な味の対策……お茶しかないのですそれをプラスチック製の小さなコップに注いでおく。

つまるところ、ただ朝カレーをしているだけに過ぎない。昨日の福島県民の朝ラーメンや一昨日の香川県民の朝うどんに比べれば幾らか健康に配慮が感じられる食事だろう。

キャラメルの口に残る濃厚な甘さをお茶で流し込んだら、カーテンを開け、舞う雪雪と白い花々を持つ樹々を見ながら、（すぐに飽きたので結局ろくなニュースもないスマホを見て）カレーを食べ進める。甘口しか置いてなかった朝から舌を焼くのは回避できた。

もしもカレーが辛口しかなかったら？ そもそもカレーを作らない。辛さから多幸感を得るタイプの人ではないので。

皿はシンクに入れるだけして部屋に戻った。特別な日だと言ってもそれが私に何か

齋すのかと、今日は12月24日と表示するスマホのカレンダーを見返す。いつも通り「今日の行動計画」を練り始めるために『メモ』を起動する。テーマパーク、図書館、ドラッグストア、放送局、ショッピングモール……。様々な場所の名前を「取消線を重ねた」で囲った。そろそろこの街の探検に近づく終、残る場所として意味があるのは美術館程度になった。他に候補としてはひたすら道路を通るといふのがあるけど……却下。

「決めた、今日の（人捜し）はこの街の美術館。そのあとは別の街に行こう」

いわゆる冬コーデというものを誰に見せるわけでもない、唯一見せるならばわたしだけだというのにする。

ただの自己満足に過ぎないのだけど一応は暖かい服装になっているから別に何も悪くことはしていない。タイツで足全体が暖かくなるとは思っていないので太ももが寒くても全く問題ない。（強がりなだけかも）メモ帳にメッセージを置いて、さつさとスノーシユを履いて外に出た。

外出用の肩掛けのアンバーカラーのバッグ、その他大切なものを入れて乗車。未だに慣れない運転である。雪を潰しながらのろのろ進む。逆に滑ることがないからこれでもいいのだけど、怪我したら取り返しがつかない。視界が悪く、信号機すら見にくい。見

にくだだけで気にする必要があるわけでもないのだけど。と、いつの間にかに到着だ。

しかし、空っぽ。美術館の中に人の気配がない。中は暖かいしきちんと明るいのだけど。試しに何か叫ぼうとして、やめた。なんだか寂しくなりそうだったから。しようがないから、わたしの心許ない美学センスとともに周っていこう。絵を見回ろうとして、すぐに3枚目の絵があるはず場所に虚い^なことに気づいた。

「あれ？」

それは外されて床に直に置かれていた。そしてそのかわりに壁にマジックペンではつきりと、まあ読みにくい字体で書かれていたメッセージ。

今日来^{20/12/10}ました、しばらくこのまちにいます

今日来^{20/12/17}ました、これからライブハウスにむかいます

「これってわたしが書いたものじゃ……ないよね？」

何度もここに向かったのを忘れるほどわたしはアホではない……

つまり他の誰かがここに書き残した？ そう、

ゆきがひどいので今年はこのまちですごします

だれか見ていたらへんじを下さい

疑問が確信へと変わった、確かにわたし以外にもこの街にいますということがわかった。書き主に会いたい、しかしその前に返事を残す必要がある。書き残しては、

^{12/24} This is Alice
はじめまして今見つけたところです

わたしもまちをたんさくしています 会いたいですね

何だかうまくいきそうな気がして、わたしは大きく叫んだ。……しかしなにも返ってこなかった。諦めの心で放却されし忘却の芸術を小走で往く。いるだろうか、いてほしいのだけど。

一通り廻り、駐車場に戻った時にひとつ車が無いことに気づいた。

「ああ……こんなこと、嘘でしょ……」

この美術館は受付から入口と出口が分かれている、つまりちようどわたしが入口に入った時にすれ違ったということ。もっと足音などに注意していれば！ 自分を責める感情が現れる。

でも諦めるわけにはいかない。暴雪でもまだ雪を潰した跡は残っている。それを追っていくしかないのだ。車に乗り込んで進んだ。千鳥足さながら不安定な運転テク

ニツクでも。

到着先は少し大きい図書館だった。西洋、というより設計がシンメトリック。ある意味これも一つの芸術。例の人物はよくある黒塗りの高級車に乗っていたようだ。ちなみにわたしは白の新型プリウス。そして入口に足を進めると、わたしはまた入ってすぐ横の壁に書き込みを見つけた。

「20／12／13

見ていたらへんじを」

「20／12／24

また来ました、私は元気」

入り口近くの白壁にこれまた堂々と書き込まれている。……どうやら16日に来たわたしは見逃してしまったようだ。重ねるように生存報告を入れて、探索に向かう。そして

「だれか〜！ いたら返事をして！」

本棚と本棚の間から呼びかけるのだ。何度も何度も。しかし返事は帰ってこない。確かにいるはずなのに……。「こどもむけのえほんコーナー」「自然科学」「休憩スペース」「歴史」どこにもいない、いない！ どこにいるの……？

思わず首を下ろした瞬間に、雪崩のような音がした。外？　まさか、一応は市街地である。となると館内、方向的に「5」のはずだ。長く続く本棚によく見ると奥に本の山がある。ちょうど「596」の棚だ。試しに一冊取って見る。「みんなで過ごすクリスマス！　一緒に作ってみたい料理100選」

人生ではじめての舌打ちをしそうになった。（多分、やつても音は鳴らせなかっただろうけど）

誰かがここの本を取ったのか、偶然か。前者を信じるしかない。あの人はここの本を取っていったのだ。一人でクリスマスを祝おうとしていたのだ。

外に出た……やっぱり、黒塗りの高級車はもう出発していた。わたしが来たことに気づいてくれなかった。どうして？　どうしてあなたは待つてくれないの？

到着したのは大型商業施設^{ショッピングモール}。クールで清潔感のある場所は雪とよく似合うもの。しかし売ってある物は和風のものが多数派を占める。降りて回ってみよう。駐車場からすぐ、まずは鏡餅に松門に……と軽く入口を見て回った時に気づいた。

「これって、車に戻ってくるまで待つてればいいんじゃない？」

そうだ、彼だか彼女だか知らないがずっと待ち伏せしてればよかったのだ。なぜ今まで思い付かなかったのだろう。やっぱり車に戻る。追いかけるだけが能じゃないわだ

しは、暖房の温度を上げた。さあいつでも来ておいで、暖かくして待つてますよ♪
しかし、誰もこなかった。なんでさ。2時間待つて来なかったの、急いでご飯を店から取つてきて、食べながら待つてもう15時。4時間待ち……。なんでさ。雪が降る中無謀ではあるが、高級車のフロントにわたしについて書いた付箋を貼つて大型商業施設ショッピングモールに向かう。

「だれか〜！ いたら返事をして！」

商品棚と商品棚の間からすでに何十回か叫んだ台詞を再び叫び走る。イチニイサン階と探し回つたけどやはり返つてこなかった。いったいどこに隠れているのだろうか。屋上も雪があるから無理だろうとサンニイイチと降りる……。しかし降りたところで気づいた、入口が二つある。ここは西口と東口に分かれていて、それぞれから入れるようになった。思い返してみればさっきの車の中に本などは一切なかった。

まさか、まさかね。ぎこちなく西口を見る。足跡が伸びている。わたしと同じか、少し大きいくらい。つまりあの人はここで車を乗り捨てて歩きで向かったということ。

「つーーー！」

生まれてはじめての舌打ちは失敗だった。なんで待つてくれないのか。何だか恥ずかしくなつてきたよ……。

美術館の時と同じく別のところから抜け出されてしまったのだ。

雪を被りながら同じ道を歩む。さくさく、さくさく。こういう時に限っては自分の体が小さくてよかったと思う。(妹より小さいくらい)相手の足跡の上から足を踏み込み、進んで行く。コーデをすべきじやなかったなあ、なんて寒さが身にしみる中今更に思う。そして右折左折直進を繰り返して着いたのは。

「わたしの住んでる、タワーマンション……」

そんなことが、そう、同じ階に30戸あつて30階建てだから、1000? そう1000分の1だよ。落ち着けわたし。900、900くらい。偶然同じマンションだからって部屋まで同じ部屋な訳……いや、ロビーに書いてあつた。

²⁰/₁₂/²⁴ 待っています。私の家族へ、4 i L (3)

途中から読めなくなっているが、ここにいる、或いはいたのが分かつた。誰宛に書いたのか……まさかわたしに? そんな筈……あるはずが無いと分かつていながらもエレベーターに乗り込まざるを得なかつた。

雪が降っているわけでもないのに震える指で、24階を押す。やけに長く感じる。遅い。世界最先端のエレベーター技術ですらここまでかかるものなのか。体感2.4分を超えて長い長い通路を進む。やつとだ。わたしの、「2412号室」の扉に小さくノツ

クする。コン、コン……。

「どうぞ?」

えっ? この声は……焦る心を抑えながら玄関で靴を脱いで……あつ、いた。

わたしの妹、リデルが。金の髪を靡かせてわたしを待っていた。うそ……!

「おかえり! お姉ちゃん」

なんか急に涙が出てきそうになって、震える声で「ただいま」と言うけど、ダメだ、それ以上声が出せない。言葉を、喉を詰まらせているとリデルがわたしのところに近づいてきて、ぎゅーっしてしてくれて……わたしお姉ちゃんなのに、ダメ……!

「怖かったよね、大丈夫だよ」

「そんなこと……平気だって……」

「大丈夫、わたしが今日はお姉ちゃんになってあげる!」

「あつ……えう」

身を埋めてわたしは泣いてしまった。

「はあ……ハア」

「大丈夫?」

「うん、まあ」

思いつきり泣いているところを見られて……うう、そんな笑顔でわたしを見ないで……。

「ほら、今日はクリスマススイブだよ！ ご馳走とかも用意してある」

「えっ……？」

いつのまにかテーブルにはパーティーさながらの食事、ピザにチキンにケーキに、本当にたくさんあった。これを全部リデルが？ すごい。だけどそれ以上にわたしのために用意してくれたような気がして嬉しかった。でも、わたしはそれを隠す為に変なことを聞いた。

「これ、全部自分で食べる為に作ったの……？」

「違うよ、二人で一緒に食べる為に！」

「じゃあ、わたしがここにくることは？」

「知ってたよ」

本当にリデルはわたしのお姉ちゃんみたい。そうだこれを渡さなくちゃ。アドベン・カレンダーに入っていて、本来なら誰かに渡すべきモノ。

「これは？」

「キヤ、キヤラメル……ここまでしてくれたお礼……」

「おおう！ ありがとう！」

よかった、喜んでくれて。

——じゃあ、早速食べようか。

「うん！」

——あ、その前に……はいこれ。

「えーつと……ジュース？」

——うん……そうシャンメリだよ。

「それってお酒なんじゃないの？」

——それはシャンパン。大丈夫だって。

「わかった」

くっく

リデルと美味しいご飯を食べて、体の芯からあったまるような気がした。多幸感に包

まれて。幸せだった。リデルと一緒に風呂に入ろうと誘われて、今は一緒に入っている。誰かと一緒にお風呂に入るなんて……どのくらい前だったかな……。

「どうだった？ ご飯は」

「本当によかったよお……ふう……」

「すっごい幸せそうな顔だね」

「そりゃあ、うん……。ねえリデル……」

「なに？」

「これからもずっといようねえ……」

「うん！ もちろんだよ！」

またぎゅーとされて……。ポカポカする……。うん、寝ちやいそう。いい1日だったなあ……。今日はダメだと思ってたら……。愛しの妹、リデルとまた会えるなんて。ここまでしつかりものに育ってくれて……。もうリデルが姉になってもいいかも。本当に純粋で、しつかり者で……。優しい子なんだね。

いや……。寝ちやダメなのはわかっていけるけど……。それでも幸せを噛み締めながらわたしは意識を闇に落とした……。

……。

……。

……。
……。

バスタオルで身をぐるんと包んで、本来の姉、アリスを運ぶ。お姉ちゃんではあるけどもわたしより身体は小さいしとつても軽い。ベッドに持つていつて……かわいい寝顔を拝める。可愛いカワイイ K a w a i i !! はあ……こうなると本当に起きないんだよねえ。まだ濡れている銀色の髪を手でさらさらと撫でる。ふう……いい匂い。大好き。あちこちをぺたぺた触ると、どこももちもちしてる。いい身体だねえ……ぐへへへへ。

元から目が醒めないお姉ちゃんだけど、ここまで起きないのには理由がある。彼女に渡したのはシャンメリではなくシャンパン。ハルジオンが入ったシャンパンだ。睡眠薬を手に入れるのは苦労したんだよね……でもおかげでぐっすりだ。

何も知らないお姉ちゃん……ずっと一人でいたお姉ちゃん……かわいいよ。全て私
が原因だつて知らないのに。本当に無様だね。あんなに泣いちゃつて……これで51
回目だ。毎週木曜日に流す涙。1月2日ははじめずつと部屋から出ないで泣いちゃつてたな

あ……。

それから記憶を消しているんな痕跡を消して。ずっと繰り返してきた。51回へ再会したし、51回へ一緒に風呂したし、51回へクスリを仕込んだ。そして50回へ記憶消去した。

正直、アリスはお姉ちゃん失格。身体もちっちゃいしなにかと天然だし。世間知らずというか、何もかもうまくいくと信じているというか……。

だから私が守ってあげないといけないのだ。だから二人きりの世界を作ったのだ。だからシリンダーの中に世界とアリスを閉じ込めたのだ。だから愛してあげたのだ。

大丈夫、女の子としては世界一だよ。おしゃれに服を着るし私を大切にしてくれるし身体もいい匂いだし。最高の輝きを持つ可憐な宝石。それを磨く為にいろんな感情が必要だったんだよ。しょうがない、しょうがないんだ。ごめんねの気持ちを込めてずっとぎゅーってしてあげる。幸せでしょ？ アリスちゃん。

そういうえば、と私はクリスマスプレゼントを用意していたのを思い出す。

身体だけじゃなく、心も大切にしてあげないと。世界の真実を込めた手紙と彼女が好きなお洋服を入れて。

Dear My Sister, Alice.

これでよし。

16 一人ぼっちの聖夜、もしくは51回の逢着。

あとに待つは……51回目のお楽しみだね！

暴かれる truth……

一緒に寝れたお陰で深く眠れたが、逆にわたしの身体は寝過ぎて少し疲れてしまったようだ。

体を起こすのに少し手間取るが、そのままのろのろと窓に向かう。

「う……いい眺めだなあ」

昨日とは大違いの快晴！ 隅々まで晴れ広がる空はまるでわたしたちを祝福しているよう。ちらちらと風に乗ってやってくる粉雪もサンビームに反射して輝いている。

日光を十分に浴びたところで部屋の方に足を歩める……。

「あれ？」

ピンクのリボンで結ばれた結構大きい白箱。ふたには「サンタクローズより」と書かれている。

おお、やっぱりサンタさんはいたんだ！ まさかりデルが準備したわけでもないしね。

少し惜しい気持ちを抱えながら、箱を開けてみる。中には360日間ずっと捜しても見つからなかった服たちが入っていた。

お菓子とかよりもずっと使えるコートの方がいいもんね。

そうやって様々な服を取り出して見ていると奥底にさらにひとつ、黒い小さな箱があった。

なんだろう？ 気になって、手を伸ばそうとした。

だけどその時、「お姉ちゃんご飯だよー」と呼ばれてしまった。プレゼントを見るのは後回しでもいいもんね、わたしは部屋を出た。

昨日の残り（結局食べきれなかったから）だけどそれでもご馳走はご馳走である。やっぱり美味しい。

「なんか嬉しそうだね」

「うん？ まあね、なんとサンタさんがわたしのところへ来たんだよ！ 信じててよかった〜」

「……うん！ よかったね」

「リデルは何かもらった？」

「いや？ なにも？」

やっぱりサンタはひどいやつだ。みんな平等にプレゼントを渡すべきだろう。

「あのさ」

「どうしたの？」

「一緒にプレゼントの中身見ていい？」

「あ……ひとつは開けちゃったけど、それでもいい？」

「十分」

リデルはプレゼントがもらえなかった分不平等だもんね……。悲しみに浸れつつ朝食を食べ終えた。

2人で部屋に戻って怪しい雰囲気を漂わせる小さな箱を開けてみよう。中身は……トランプと折り畳まれた手紙？ 手紙を開いて見てみる。なんだか嫌な予感がしなくもないような……。

予感は当たった。

◆サプライズ・レター！ ◆

これダサイかな……

アリスのサンタ！ リデル

こんにちはお姉ちゃん。大切なおはなしがあります。

あなたをこの誰もいない世界に閉じ込めたのは私です！

どういふことかわからないと思いますが、実際のところ、あなたと私だけを誰もいな

い並行世界に飛ばしただけなので安心してください。

一緒に入っているそのトランプ、それを使うと1週間並行世界に行けるので、その度にお姉ちゃんの記憶をデスクロクロクザピンで楽しんでいました。（この楽しみをお姉ちゃんには知らないと思うので、隠しておきます）

流石に本能的に学習したのか、一枚目の時よりは、かなりマシに私を追いかけられるようになったみたいですが、やっぱりお姉ちゃんはお姉ちゃんなので最後まで泣いてましたね。可愛くてすきです。本当に。

もちろん、ただお姉ちゃんを虐めたいだけで誰もいない世界に飛ばしたわけではないよ。

これはお姉ちゃんを守る為にやっているのです。

考えてみてください。わたしより身体が小さくて、ちよっぴり怖がりで天然、守ってあげたくなるかわいいお顔。女の子としては素晴らしいけど、お姉ちゃんとしては失格です。大人になったら誰かに騙されるかもしれない。だからわたしが守る必要があったんですね。

安心してね、妹の素質があるのはわたしがこの目で確認したよ。「お姉ちゃん妹化計画」は大成功です！

では、これから妹としての自覚を持ってもらいます！

「何……え……？」

わたしとリデルしかない世界を作ったのはリデル……？ わたしを守るため……？
妹としての自覚……？

「リデル……おかしいよこんなの……」

「リデル？ 違うよね、お姉ちゃんでしょ？」

「ひゃ……う、ダメだよこんなの」

その瞬間、「おしおき」の声とともにトランプのカードが頭に強く刺された。

「うんあつ……あ、あ、あ……」

——アリスちゃんは可愛いなあ、寝たらすぐ絶対に起きれない。

——ふふ、お寝坊さんかな？ ご飯作ってあげないとね。

「なに……これ」

「アリスが妹だつていう証拠だよ」

「ダメ……そんなの」

「じゃあ……スリーカード」

「うんあつ……あつあつあつあつあつ」

「『うっ……寂しかったよおおお』」

「はいはい落ち着こう？」

「『ひゆう、ひゆう、はあ……』」

「ほらぎゅーつとしてあげるから。」

「『ん……頭撫でないで……』」

「なら私より大きくなってよアリスちゃん。」

「『まるで……リデルがお姉ちゃんみたい』」

「どう？ これでもダメ？」

「……………」

「選ばされてあげる」

「……そうしてお姉ちゃ……リデルは、私にトランプを見せてきた。」

「今、元の世界の52枚目、最後のカードを使ったところなんだよね」

「でもここにもトランプがある。並行世界にあるもの」

「これを使わないでお姉ちゃんにいるか、これを使って妹になるか」

「……………」

「わからないかあ……ファイブカード」

「おっ？ えっ？ あっあっあっあっ！p!? えああ……」

「どっち？」

「妹になるよ……お姉ちゃん」

えっ!? あれわたし間違えてリデルのことお姉ちゃんって……。

その瞬間お姉ちゃんがわたしのことをぎゅーっとしてくれて。

「えらい！」

「えらい……？」

「じゃあ、早速行こうか！ 2人だけの世界に！」

お姉ちゃんがカードを天に捧げると、わたしたちの身体は光に包まれていった。

ああ……本当に可哀想で、惨めで、無様で、可愛いなあ……アリスちゃん。

実の妹に洗脳されて自分が妹だと信じ込むなんて……あはっ。

この世界で私は一番優れた姉だし、アリスちゃん是世界一ダメな妹……。そう思うとなんだか笑いがこみ上げてしまう。

いつになったら気づくのかな、もしかしたら永遠に気づかない？ だったらまた私が教えてあげよう。

いつもの、着飾って碧眼を輝かせて笑顔でいる姿も好きだけど、絶望に囲まれて目のハイライトが消える瞬間も大好き。

あのすごい誰かに守って欲しそうで、自分の非力感を感じてそんな表情……全て私の手のひらの上……あははははっ。

実をいうと、これは8回目のループに値する。すでに同じトランプを8回使ったし、8回ネタバラシして表情やセリフを見てきた。恨みがあるわけではないけど、見ていてとても爽快だった。実妹の裏切りなんてなかなか現実でみないもの！

1月1日になったらまた記憶を消去して、彼女はお姉ちゃんになってもらう。だってループの為だもの。

アリスちゃんへの絶望で9枚使ったけど、まだ40枚程度使用済みのトランプがあった、それらはその間に起きた出来事を記憶してくれる。

どうしようかな……次はこれを全部刺して精神壊して変な声出させるのもいいかも。

お姉ちゃんのどこか未熟で可愛らしい声が壊れる瞬間……いいね。

私は妹のアリスと戯れながら、そんな平和なことを考えるのであった。